

リカードウ研究

— 価値と分配の理論 —

羽 鳥 卓 也 著

未 来 社

リカードウ研究

一九八二年二月二六日 第一版第一刷発行

定価 六〇〇〇円

◎著者 羽鳥卓也

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三の七
振替（東京）七―八七三八五番

本文印刷 第一印刷

製 本 今泉誠文社

仮営業所

東京都豊島区駒込一―三―一五
電話〇三―九四三―六八四一と四番
期間 一九八〇年五月一五日～一九八二年四月三〇日

乱丁・落丁本はおとりかえします。

リカードウ研究

目次

第一部 初期リカードウの分配理論

第一章 初期の利潤率低下論……………九

——一八一四年の手紙を検討して——

第一節 本章の課題について……………九

第二節 農業利潤率低下の論証……………二六

第三節 農業利潤算定方法の変更……………二六

第四節 農業利潤による一般的利潤率の規制……………三三

第五節 製造業利潤率低下の論証とその変更……………三三

第二章 いわゆる「穀物モデル分配理論」について……………三三

——『利潤論』（一八二五年二月刊）を検討して——

第一節 本章の課題について……………三三

第二節 『利潤論』刊行の経緯……………三三

第三節 『利潤論』の農業利潤と地代の分析……………三三

第四節 『利潤論』の分配理論の問題点……………三三

- (一) 穀物の相対価値の変動について (三六) (二) 実質賃金と穀物賃
金との乖離 (三七) (三) 穀物ターム分析と支配労働価値説 (三八)

第五節 『利潤論』の商工業利潤率低下論……………三六

第六節 『利潤論』の実質賃金一定の想定について……………三六

第三章 『経済学原理』形成史のひとつま……………101

——一八一五—一六〇六年の手紙を検討して——

第一節 本章の課題について……………103

第二節 『利潤論』刊行直後のマルサスとの論争……………106

- (一) マルサスの『利潤論』批判 (106)
- (二) リカードウの応酬 (111)
- (三) 論争の継続 (117)

第三節 リカードウ分配理論の変貌……………113

- (一) マルサスとの論争の新局面 (113)
- (二) 価格ターム分配理論の形成 (116)

第四節 実質賃金一定の想定をめぐるマルサスとの論争……………116

- (一) 一五年五月のマルサスの手紙 (116)
- (二) 一五年五月のリカードウの手紙 (119)

第五節 《労働》の価値可変性の認識について……………121

- (一) 利潤率低下論における農工商部門の総括 (121)
- (二) 《労働》の価値可変性の認識について (126)
- (三) マルサスとの論争の継続 (129)

第二部 『経済学原理』の価値と分配の理論

第四章 価値論と「社会の初期段階」……………125

——『経済学原理』第三版の改訂箇所をめぐって——

第一節 本章の課題について……………126

第二節	スラッファ説の概要……………	一五
-----	----------------	----

第三節	ミーク説およびムーア説の概要……………	一六
-----	---------------------	----

第四節	スラッファ説の検討……………	一七
-----	----------------	----

(一) 一八一八年二月のリカードウのミルあて手紙について (一七)

(二) トレンズのリカードウ価値論批判 (一七) (三) リカードウの反

批判 (一七) (四) スラッファ説への疑問の第一点 (一八) (五) ス

ラッファ説への疑問の第二点 (一八)

第五節	「社会の初期段階」の想定の変更……………	一八
-----	----------------------	----

第五章	価値論と階級間分配率命題……………	二〇
-----	-------------------	----

——『経済学原理』第三版の改訂箇所をめぐって——

第一節	本章の課題について……………	二〇
-----	----------------	----

第二節	価値論と分配理論との関連……………	二三
-----	-------------------	----

第三節	賃金の騰落と分配比率……………	二五
-----	-----------------	----

第四節	地代の騰落と分配比率……………	二六
-----	-----------------	----

第六章	分配理論と「不変の価値尺度」……………	二七
-----	---------------------	----

——一八一九—二〇年の資料を検討して——

第一節	スラッファの所説について……………	二八
-----	-------------------	----

第二節	一八一九年後半期のマルサスとの論争……………	二九
-----	------------------------	----

(一) マルサスのリカードウ価値論批判 (二九) (二) リカードウの応

酬 (二九) (三) 論争の継続 (二九)

第三節	マルサス『経済学原理』のリカードウ批判……………	三〇〇
-----	--------------------------	-----

- (一) リカードウ価値論に対する批判 (二六〇)
- (二) リカードウ「不変の価値尺度」論に対する批判 (二六三)
- (三) リカードウの賃金・利潤相関関係論に対する批判 (二六五)

第四節	一八二〇年五・六月のリカードウの新見解……………	三〇九
-----	--------------------------	-----

- (一) 五月二日づけマカロックあて手紙について (二六九)
- (二) 六月一日づけマカロックあて手紙について (二七五)

第五節	「不変の価値尺度」論修正の含意と未解決問題……………	三二二
-----	----------------------------	-----

- (一) 貨幣の生産条件の想定の変更の含意 (二八三)
- (二) リカードウの未解決問題と「弱気」について (二八七)

第三部 晩年の「絶対価値の尺度」の探索

第七章	価値と自然価格との乖離について……………	三九〇
-----	----------------------	-----

——一八一八—二二年の資料を検討して——

第一節	問題の所在……………	三九六
-----	------------	-----

第二節	一八一八年のトレンズとの論争……………	三〇三
-----	---------------------	-----

第三節	一八二〇年のマルサスとの論争……………	三〇六
-----	---------------------	-----

- (一) マルサスのリカードウ価値論批判 (三〇六)
- (二) 六月一三日づけマカロックあて手紙のリカードウの反応 (三二〇)
- (三) 『マルサス評注』のリカードウの反応 (三二〇)

第四節 『原理』第三版の価値論の章について……………	三六
----------------------------	----

(一) 価値と自然価格との乖離についての認識 (三六)	
(二) 第三版準	

備期の価値論改訂の方針 (三七)	
------------------	--

第八章 晩年の価値尺度論争への参加……………	三七
------------------------	----

——一八三三年の手紙を検討して——	
-------------------	--

第一節 晩年の価値論研究の焦点……………	三七
----------------------	----

第二節 価値尺度をめぐるマルサスとの論争……………	三九
---------------------------	----

(一) マルサス『価値尺度論』の輪廓 (三九)	
(二) リカードウの反論	

(三〇) (三) 論争の継続 (四〇)	
---------------------	--

第三節 価値規定をめぐるマカロックとの論争……………	三八
----------------------------	----

(一) リカードウの問題提起をめぐる (三九)	
(二) リカードウの批	

判 (三九) (二) マカロックの応酬 (四〇)	
--------------------------	--

第九章 未完の遺稿『絶対価値と交換価値』について……………	三八
-------------------------------	----

第一節 二種類の草稿について……………	三八
---------------------	----

第二節 「第二草稿」について……………	三九
---------------------	----

第三節 「第一草稿」の後半部分について……………	四〇
--------------------------	----

あとがき……………	四三
-----------	----

第一部

初期リカードウの分配理論

第一章 初期の利潤率低下論

——一八一四年の手紙を検討して——

第一節 本章の課題について

デイヴィッド・リカードウ (David Ricardo, 1772—1823) は一八一四—五年の穀物法論争期にすでに利潤率の傾向的低下に関する命題を提示していたばかりでなく、資本主義の長期的趨勢としての利潤率の動向を規制する要因を、究極的には蓄積過程における劣等地耕作の進展に伴う農業生産性の低下に求めていた。そのうえ、かれは穀物生産の困難による穀価の上昇にもとづく賃金の騰貴が利潤率を低落せしめる要因として作用するという点をも指摘していた。これらの事實は、一八一七年に刊行されたリカードウの主著『経済学原理および課税』(On the Principles of the Political Economy, and Taxation) のなかで独自の体系化を与えられたかれの蓄積と分配の理論がすでに穀物法論争期に端的に形成されていたということを物語るものといわなければならない。

しかし、利潤率の低下傾向という命題がすでに穀物法論争期に提示されていたといっても、この命題の理論的論証という点では、『原理』のなかで与えられたものとは小さくないちがいがあった。この点に関して、リカードウ自身の見解に小さくない変遷があったことを最初に指摘したのは、P・スラッファであった。かれは穀物法論争期のリカードウの論述を検討して、当時のリカードウの所論を支える基本原理が「農業者の利潤が他のあらゆる産業の利潤を規制する」⁽¹⁾という、かれが一四年三月八日に友人トラワ (Hutches Trower, 1777—1833) にあて

た手紙のなかに書いた命題におかれており、これに対して、この命題は後年の『原理』では全く消え失せてしまったと主張した。こういう所見を含むスラッフア説の概要をごく簡略に紹介すれば、こうである。

——当時のリカードウは、農業においてだけは他の産業とはちがって、投入と産出とがすべて穀物という同一種類の商品から成っていると考えており、そこから農業利潤を投入としての穀物量と産出としての穀物量との差額として捉えることができ、したがって「価値評価を少しも問題とせずに」農業利潤率を算定できると考えていた。こうしてかれは農業利潤率の変動がもつばら農業生産性の変化のみに依存するのであって、穀物価格の変動には全く左右されないと考えた。それから、かれは農業のみが投入として他産業の生産物を必要としないのであり、他産業は投入として農産物を必要とするという点に着目したうえで、社会の異種産業諸部門間における利潤率が均等化されなければならない以上、製造品の価格は当然製造業の利潤を農業利潤に合致せしめるような価格水準に帰着するように調節されるにちがいない、と推論した。⁽²⁾——

スラッフアは、穀物法論争期のリカードウが上記のような「穀物比率論」にもとづいて農業利潤率を算定し、そのうえで商工業の利潤は農業利潤によって規制されるという命題を提示し、それによって一般的利潤率の低下傾向を説いたと述べている。⁽³⁾一九五一年に発表されたスラッフア説は学界に大きな反響を呼び、間もなくR・L・ミークやG・S・L・タッカーによって基本的に承認され、学界に新たな定説としての地位を占めるに至った。⁽⁴⁾しかし、一九六〇年代後半からスラッフア説に対する批判的検討が開始され、今日では異端説に傾く者も無視できない存在になったといつてよいだろう。⁽⁵⁾

(1) *The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. by P. Sraffa, VI, p. 104. (以下、この書物から引用する場合、以下ではただ単に *Works* と略記する)。

(2) Cf. Sraffa, Introduction to the Works of Ricardo, I, p. xxxi.

(3) Cf. *ibid.*, p. xxxii.

(4) Cf. R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, 1956, pp. 68—95; G. S. L. Tucker, *Progress and Profits in British Economic Thought, 1650—1850*, 1960, pp. 96—104.

(5) 一七七七年頃までに発表されたスラッファ説批判を含む論考を発表年次順に並べれば、以下のとおりである。(1)拙稿「初期リカードウの価値と分配の理論」(福島大『商学論集』三四卷三号所収)一九六五年。(ただし、この論文は後に加筆補正を施されて拙著『古典派経済学の基本問題』一九七二年刊に収録された。)(2)中村廣治「リカードウ『経済学原理』の生成過程」(大分大『経済論集』二〇卷一號所収)一九六八年。(ただし、この論文は後に加筆補正を施されて同氏の著作『リカードウ体系』一九七五年刊に収録された。)(3)千賀重義「初期リカードウにおける価値と貨幣の理論」(名古屋大『経済科学』一九卷三号所収)一九七二年。(4)S. Hollander, *Ricardo's Analysis of the Profit Rate, 1813—15, Economica*, Vol. 40, No. 159, 1973。(5)飯田和人「初期リカードウの価値と分配の理論」(『明治大学大学院紀要』第二二集所収)一九七四年。(6)S. Hollander, *Ricardo and the Corn Profit Model; Reply to Eatwell, Economica*, Vol. 42, No. 166, 1975。(7)横山照樹「リカードウ利潤理論の形成」(同志社大『経済学論叢』二五卷三・四号所収)一九七七年。(8)丸山武志「初期リカードウの利潤理論」(大阪市大『経済学雑誌』七六卷六号所収)一九七七年。(9)拙稿「初期リカードウの利潤率低下論」(岡山大『経済学会雑誌』九卷一・二号所収)一九七七年。

なお、論説(4)に対する批判を行い、スラッファ説を擁護した論文として J. Eatwell, *The Interpretation of Ricardo's Essay on Profits, Economica*, Vol. 42, No. 166, 1975. をあげる事ができるが、ホルンダーの論文(6)はこのイートウールの批判に対する反批判である。

また、(9)の拙稿は、本書の本章の原型をなすものである。

しかし、スラッファ説に異論を唱えた論者がみな同じ意見を述べたというわけではなく、異端説相互の間にも小さくない見解の差異がある。だが、いまはそれらの諸説を個別に紹介する余裕はないから、そのなかでとくに注目すべき見解を含んでいる中村廣治・ホルンダーの両氏の所説の一部分だけを紹介するに止めたい。

はじめにS・ホランダー説をとりあげよう。ホランダーによれば、初期リカードウの利潤論の基本内容をスラッファのように捉えるのは「[当時の]リカードウの意図を正確に反映するものではない。」一八一三年から一五年二月頃までのリカードウの友人あて手紙の文面を検討すれば、そこには『原理』に現れたのと同じ命題、つまり賃金財の価格変動の結果生ずる貨幣賃金率の変動がそれと逆方向への一般的利潤率の運動を伴うという命題が、実質的には当初から主張されていた⁽⁷⁾ということが分るはずである。その当時、リカードウが時折、農業利潤を穀物量で示された投入と産出との差額によって算定し、農業利潤率の低下を農業生産性の低下から直接に説明しようとしたり、あるいは、一般的利潤率が農業利潤率に規制されて変動すると記したりしたのは、たしかに否定できない事実ではあるが、しかし、この説明様式が当時のリカードウの所論の真の含意を忠実に表現するものであったわけではけつしてない。当時のリカードウの真意としては、かれが農業生産性の低下から穀価の上昇を説き、穀価の上昇にもとづいて貨幣賃金率の騰貴を主張し、そこから一般的利潤率の低下を説明しようとしていたことは明らかであり、したがって、ここには未熟ながらも後年の『原理』における利潤率低下論の基本的骨組が形成・定着しつつあったとみてよい、とホランダーは主張するのである。⁽⁶⁾

つぎに中村説をみよう。氏によると、リカードウは一八一三年から一四年三月までは、農業生産性の低下から短絡的に農業利潤率の低下を結論し、ついで、一般的利潤率は農業利潤によって規制されるために低下傾向を辿らざるをえないという説き方をしていたけれども、一四年後半期になると、かれの利潤率低下論は全く異なる論理展開を示すようになった⁽⁷⁾のである。

一四年六月二六日づけのリカードウのマルサスあて手紙のなかに、「利潤率および利子率は、生産とその生産にとって必要な消費との比率に依存しなければなりません。」⁽⁸⁾という一文がある。スラッファはこれを「穀物比

率論」による農業利潤の算定方式の表明とみなしたけれども、中村氏はこれを一般的利潤率が農工兩部門を一括した全産業の投入・産出比率に依存するという見解の表明とみるべきだと主張して、スラッフア説を否認する。そして氏は、リカードウがこの同じ手紙のなかで、この「比率」が食糧の低廉性に依存するという趣旨を記していることに着目すれば、一四年後半期のリカードウが蓄積↓劣等地耕作↓穀価騰貴↓貨幣賃金率騰貴↓一般的利潤率低下という論理の筋から成る利潤率低下論を提示していたとみることができると主張する。かくして、氏によれば、一四年後半期のリカードウの見解は一四年三月までのかれ自身の旧説を大幅に変更した「新定式」ともいべきものであり、これは「事実上、かれの『経済学原理』の、したがってリカードウ体系の巡回基軸をなすともいべき賃金・利潤相反関係論……の基胎をなすものといいうるであらう。」⁽⁹⁾といふのである。

一四年後半期のリカードウ理論の理解の仕方に関する限り、中村氏とホランダーとは相通ずるところきわめて多い見方を提示しているといつてよいだろう。もっとも、中村氏は当時のリカードウの「新定式」が単なる価格タム分析のみから成るものではないという点にも注意を払う必要があると付言し、ホランダー説とも異なる解釈を提出している。すなわち、当時のリカードウの「新定式」には価格タム分析とともに実物タム分析が混入しているというのであって、氏によれば、かれの「新定式」には二様のアプローチが「未分化のまま渾然一体たるケイオスのままに論述されている」⁽¹⁰⁾というのである。

(6) Cf. Hollander, Ricardo's Analysis, *op. cit.*, p. 260.

(7) 中村、前掲書、四五―六頁参照。なお、リカードウ研究史上近年の最も注目すべきこの労作に対するすぐれた書評として、千賀氏の文章をあげておきたい(大分大『経済論集』三〇巻一・二合併号所収、一九七八年)。

(8) Works, VI, p. 108.

(9) 中村、前掲書、六二頁。

(10) 中村、前掲書、六三頁。

穀物法論争期のリカードウが抱いていた利潤率低下論はいったいどのような理論内容のものであったのか。この問題に対する解答として、われわれはスラッフ説以来、さまざまな見方を教えられてきたのだが、目下のところ諸学説の間にはさまざまな論点をめぐってさまざまに異なる理解の仕方が提示されているため、それらの学説を整理することさえも容易ではないほどである。しかし、こういう多様な解釈が生まれてきたのも理由のないことではない。理由のひとつは利用可能な資料の制約という点にある。というのは、穀物法論争期にリカードウが公表した作品は、一五年二月に執筆・刊行した『利潤論』(An Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of Stock) だけであって、それ以外の資料はすべてリカードウが友人との間にとりかわした私信だからである。そして、これらの手紙のなかには失われて欠落したものがあること、また、私信の場合には当然のことだが、執筆者が文章に十分に推敲を加えていない場合も少なくないし、そのうえ、発信者は気心の通じ合う受信者のみに理解してもらえさえすればよいという態度で可能な限り簡略な文章を作成しようとするための、第三者であるわれわれには判じ物の文面のようなものさえけっして少なくはない。そして、資料の制約として、致命的ともいえるべきもう一つの事情が加わる。それは一四年前半期については、リカードウ発信の手紙も受信のものも大半が失われて欠落していることである。なかでも、この期間(正確に言えば、一月二日から六月二十五日まで)におけるリカードウとマルサス(Thomas Robert Malthus, 1766-1834.)との間の往復書簡がすべて失われたことは、大きな痛手である。

こういうわけで一四年のリカードウ理論の内容を明らかにする作業には大きな困難が伴うが、しかし、一四年後半期についてはリカードウ・マルサスの往復書簡がほとんど欠落なしに相当数が残されているから、われわれ